

坂手隈横穴墓 坂手隈城跡

—国道212号交通安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005年3月

大分県教育庁埋蔵文化財センター

坂手隈横穴墓 坂手隈城跡

—国道212号交通安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005年3月

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が国道212号交通安全工事に伴い、大分県中津土木事務所の依頼を受けて実施した坂手隈城跡・坂手隈横穴墓の発掘調査報告書です。

中津市は大分県北西端、福岡県との県境に位置しており、国指定史跡福沢論吉旧居をはじめ中津城や相原廃寺など、数多くの遺跡が点在しています。

今回調査した坂手隈城跡や坂手隈横穴墓は、福岡県との県境をなす山国川右岸、河口から約5キロメートル上流の下毛原台地北西端に位置しています。ここでは坂手隈城跡に伴う大型の堀や古墳時代後期の横穴墓1基が発見され、古墳時代から中世にわたる人々の長い営みの跡を明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護並びに地域の先人の生活を理解する資料として、さらには、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成17年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 伊藤 正行

例 言

1. 本書は平成15年度に実施した国道212号交通安全工事に伴う坂手隈横穴墓及び坂手隈城跡の調査報告書である。
2. 調査は、大分県教育委員会が大分県中津土木事務所の委託を受け実施した。
3. 遺跡・遺構の実測と撮影は坂手隈横穴墓については高橋信武、後藤一竜、甲斐寿義が、坂手隈城跡については松本康弘、戸田英佑が主に行った。遺物の実測及びトレースは大分県教育庁埋蔵文化財センターで行い、遺物の写真撮影は植島隆二が行った。
4. 本書で用いた方位はすべて真北である。
5. 本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
6. 本書の執筆は、甲斐寿義、松本康弘が行い、編集は甲斐が行った。

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査団の構成	1
第2章	遺跡の立地と環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第3章	坂手隈横穴墓の調査	3
第1節	報告にあたって	3
第2節	発掘調査の記録	4
1.	調査経過と概要	4
2.	遺構と遺物	5
(1)	立地・調査前の状況	5
(2)	墓道・前庭部	5
(3)	羨道・玄室	6
(4)	出土遺物	6
前庭部		6
玄室内		10
第3節	まとめ	14
第4章	坂手隈城跡の調査	21
第1節	調査経過と概要	21
第2節	遺構と遺物	23
1	柱穴群	23
2	土塁	24
3	堀	24
第3節	まとめ	26

坂手隈横穴墓

図版目次

第1図	坂手隈横穴墓・坂手隈城跡周辺の遺跡分布図…	2	第2図	横穴墓等の名称……………	3
第3図	坂手隈横穴墓周辺地形図……………	4	第4図	調査区付近拡大図……………	5
第5図	坂手隈横穴墓上層図……………	6	第6図	坂手隈横穴墓平・断面図……………	7
第7図	坂手隈横穴墓前底部遺物出土状況……………	8	第8図	坂手隈横穴墓前底部出土遺物実測図……………	9
第9図	坂手隈横穴墓玄室内遺物出土状況……………	11	第10図	坂手隈横穴墓玄室内出土遺物実測図……………	12
第11図	坂手隈横穴墓玄室内出土遺物実測図2…	13	第12図	上ノ原横穴墓群……………	14

表目次

第1表	坂手隈横穴墓出土鉄器計測表……………	10
第2表	坂手隈横穴墓出土土器観察表……………	17

写真図版目次

図版1	坂手隈横穴墓遠景・遺物出土状況……………	18	図版2	羨道部排水施設・前底部出土遺物……………	19
図版3	前底部出土遺物・玄室内出土遺物……………	20			

坂手隈城跡

図版目次

第13図	坂手隈城跡の位置とその周辺地形図……………	21	第14図	坂手隈城跡遺構配置図……………	22
第15図	坂手隈城跡土塁実測図……………	23	第16図	坂手隈城跡堀実測図……………	24
第17図	坂手隈城跡堀下部の道実測図……………	25	第18図	坂手隈城跡堀出土遺物実測図……………	25
第19図	坂手隈城の縄張り図と今回の調査区……………	26			

写真図版目次

図版4	坂手隈城跡堀出土遺物……………	25	図版5	坂手隈城跡遠景・遺構……………	27
-----	-----------------	----	-----	-----------------	----

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

国道212号交通安全事業に伴う工事予定地は山国川右岸の丘陵斜面に位置する。この国道212号は中津市と川口市を結ぶ県西部の主要幹線道路として重要な役割を果たしている。しかし、近年の交通量の増加に伴う慢性的交通渋滞を引き起こしていることも事実であり、このため県中津土木事務所では平成10年度に国道212号の渋滞解消と交通の円滑化を図るため、交通安全工事に着手することになった。事業開始に伴い、県土木から分布調査の依頼を受けた県教育委員会文化課では、本工区が遺跡存在の可能性が非常に高いことから事前の試掘調査の必要な地区と回答した。これをうけた中津土木事務所は用地買収などの条件が整った対象地区ごとに試掘調査の依頼を県文化課に行い、平成13年度には2次にわたって八幡鶴市神社周辺の坂手前遺跡の調査を実施している。その後、平成14年度末に工事中に横穴墓が1基発見され緊急調査の必要が生じ、平成15年4月に、また、平成15年5月の試掘でも坂手限城の遺構を確認したため、平成15年7月に本調査を実施することとなった。

本調査は坂手限横穴墓の本調査を平成15(2003)年4月7日から平成15年4月19日の間まで、坂手限城跡の調査を平成15(2003)年7月28日から平成15年8月28日の間実施した。

第2節 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県教育委員会教育長		石川公一
	大分県教育庁文化課課長		今永一成
	同	参事兼課長補佐	麻生祐治
	同	参事兼課長補佐	清水宗昭
	同	主幹	栗田勝弘
調査員	同	主幹	高橋信武
	同	副主幹	後藤一重
	同	副主幹	甲斐寿義(調査担当)
	同	主査	松本康弘()
	同	嘱託	戸田英佑

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北端に位置しており、西は福岡県築上郡吉富町・新吉富村・大平村と、東は宇佐市、南には三光村と接する。市域は約55.67km²、人口約6.7万人の福岡県との県境の商業都市である。福岡県との県境をなす一級河川の山国川は市の西部を北上し岡防灘へ注ぎ、山国川の沖積作用により扇状地が形成され、扇状地は市の西半分を占め、沖代平野と呼ばれている。市の南部には洪積台地である、通称「ド毛原台地」が広がり、坂手限横穴墓及び坂手限城はこの台地上に所在している。

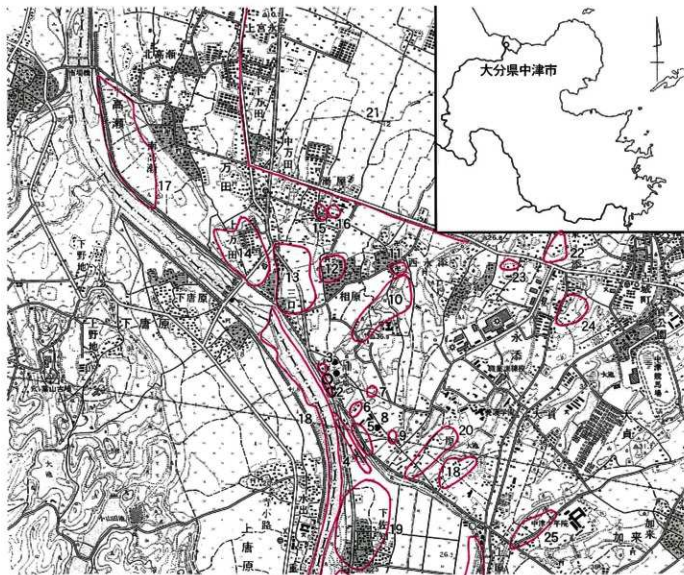
第2節 歴史的環境

人々は古くから西の山国川、東の犬丸川沿いに遺跡を残している。旧石器時代の遺跡は少ないが、土/原遺跡で細石器や剥片が出土するなど人々の生活の痕跡を旧石器時代まで遡ることができる。縄文時代になると、遺跡の数は増大し、縄文時代早期～晩期には犬丸川沿いの後期の住居跡や輪と土が発見された思木遺跡、後期に入ると恒貝塚を伴うボウガキ遺跡、植野貝塚、山国川沿いの三光村佐知遺跡、土偶が発見された高畑遺跡などが知られる。

弥生時代になると遺跡の範囲は広がり、沖積平野の低地でも確認できるようになる。前期後葉～中期初頭で山国川流域の上ノ原平原遺跡では貯蔵穴が、中期では犬丸川沿いの福島遺跡で集落が展開する。森山遺跡では前期末～後期初頭までの集落が検出されている。後期においては山国川の自然堤防上の佐知遺跡、対岸の大平村下唐原郷ヶ原遺跡など古墳時代へ続く大規模な集落が形成される。これらに対応するように、三光村藤山遺跡B・C地区や石蓋土坑群が検出された岡崎遺跡などが出現し、助動野地遺跡では方形周溝墓や土坑墓が発見される。5世紀～8世紀には繁原古墳や土/原横穴墓群などが築造される。今回、調査した坂手限横穴墓はちょうどこの時期に当たる。南東部の山地には6世紀後半から8世紀にいたるまで大規模な窯跡群が作られ、須恵器や瓦などが焼かれる。

古代において中津市は、豊前の国下毛郡に属していたが、それ以前には福岡県築上郡とともに三宅郷である。大宝2年（702年）の正倉院文書にはすでに上毛郡の記載があり、福岡県側が上毛郡（4郷）、大分県側が下毛郡（7郷）に分割される。この時代の遺跡は市内南部を東西に横切る推定古代官道沿いに集中する。相原廃寺や本遺跡の周辺の三口遺跡などが挙げられる。長者原敷遺跡は下毛郡衝に付属した正倉と目されている。

中世になると丘陵上に堀や上屋を伴った城館が出現する。坂手隈城もその一つで、神代平野を繋ぐ交通の要衝に築城されている。中世文書により、この地方の諸將の活躍する姿が知られるが、大友末期には大友氏に反旗を翻した諸將が大友系の諸城を攻撃するが、相原氏の守るこの坂手隈城も宇都宮一族の野中氏により攻撃を受けている。



1 坂手隈城跡	6 勢加塚古墳群	11 法華寺遺跡	16 市場遺跡	21 神代地区糸里跡
2 坂手隈横穴墓群	7 相原古墳群	12 相原廃寺	17 高瀬遺跡	22 梶屋遺跡
3 坂手前横穴墓群	8 上人塚古墳	13 三口遺跡	18 大池南遺跡	23 永孫中園遺跡
4 上ノ原横穴墓群	9 柳ヶ追池東遺跡	14 上万田遺跡	19 佐知久保畑遺跡	24 八並城跡
5 駒助野地遺跡	10 台遺跡	15 福永城跡	20 六畝町遺跡	25 清水郎西遺跡

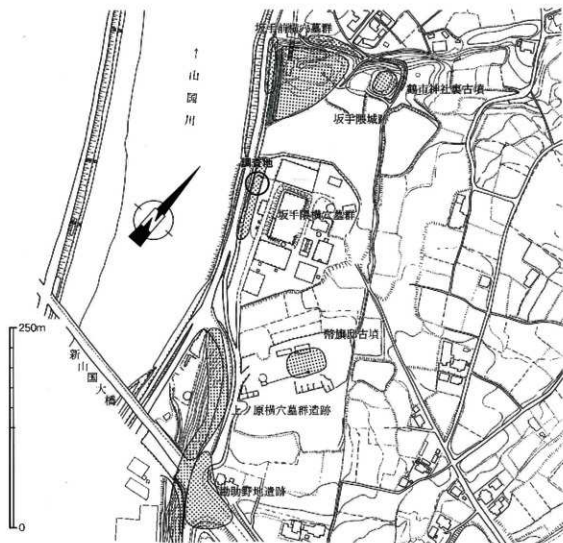
第1図 坂手隈横穴墓・坂手隈城跡周辺遺跡分布図

第2節 発掘調査の記録

1. 調査経過と概要

坂手隈横穴墓群は中津市大字和原に所在し、山国川右岸、標高約33mの洪積台地西端の急峻な崖面に位置する。この横穴墓群は、昭和40年以前に中津市教育委員会によって調査が行われ、13基の横穴墓を確認し、多数の土器と須恵器が出土したという記録が残っているが(註1)、これらの横穴墓はすでに後世の開発により羨道部の存在も不明瞭なほどに原状が変更されており、また玄室も天井部が崩落した状態で検出している(註2)。

今回調査した横穴墓は、国道212号交通安全事業の掘削工事中の平成15年3月に玄室の天井部が陥没し、その存在が明らかとなった。中津土木事務所より報告を受けた大分県教育委員会では、遺跡の確認を行うと共に中津土木事務所と協議し、本調査を実施することとなった。本調査は平成15(2003)年4月7日から平成15年4月19日の間実施した。その結果、この横穴墓は、羨道部は消滅しているが前庭部と閉塞石が良好な状態で遺存した未開口の横穴墓であり、前庭部から須恵器、玄室からは須恵器や鉄鏝等を検出した。



第3図 坂手隈横穴墓周辺地形図 (1/5000)

2. 遺構と遺物

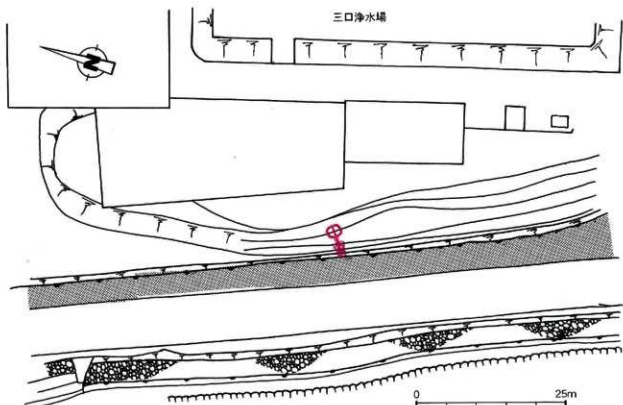
(1) 立地、調査前の状況

坂手隈横穴墓は、山国川に面した丘陵西端、標高約33mに位置する。礫混じり粘質土層に掘り込まれている。全長は約5.6mを測り、主軸はN-57°-Eにとる。保存状態は良好で、発掘調査実施前は、前庭部は完全に埋没しており、また、のり面工事によりコンクリート壁で塞がれ地表での確認はできなかった。調査は玄室内の清掃および前庭部プランの確認後、埋土及び前庭部、閉塞施設、玄室内の順に調査を行った。

(2) 墓道・前庭部

規模・構造 (第6図)

墓道は全長が約2.56mで、軸は現存する入口部で約1.28m、羨門部では上部幅約1.72m、底面幅約1.36mを測るが、工事の際、上部が削平されており側壁高は不明である。床面は5°前後の緩やかな傾斜で羨門に向かって上る。入口から約1.1m羨門方向へ寄った位置までは墓道幅が狭く、その後羨門まで広がる逆台形状を呈した前庭部をつくる。この前庭部の中央には排水溝が約1.2m掘られており、その溝の端部付近が床面上で約20cmのゆるい段となっている。この排水溝には2枚の板石を蓋石として利用しているが、この蓋石の中には赤色顔料が塗布されており、石棺の蓋石を再利用したものであろう。前庭部最深部は約70°前後の傾斜を持つ壁となり側壁の傾斜は70°で立ち上がる。羨門の立面は方形で、前庭部最深部の壁ほぼ中央に穿れており、羨門高は0.72m、幅は0.52mを測る。閉塞石は板石(安山岩系)を2枚使用し、隙間を準大の円礫で目張りした後に、人頭大の河原円礫で板石が動かぬよう下部を支える。



第4図 調査区付近拡大図 (1/625)

墓道部土層（第5図）

墓道部の土層は、樹根等の擾乱を受けておらず、比較的明瞭な層区分が可能な状態で4層群13層に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

第1層群（E層） 墓道形成直後に堆積した基盤土の二次堆積である。

第2層群（D層） 羨門から墓道入り口まで堆積し、わずかに遺物を含む。初葬後の二次堆積層である。

第3層群（A～C層） 1回目の追葬後の二次堆積である。羨門下部から墓道入り口にかけて閉塞施設と排水施設を覆うようにレンズ状に堆積しており、閉塞石を隠すための埋土である。C層下面が追葬時の床面。A・B層に遺物を含む。

第4層群（1～8層） 2回目の追葬後の二次堆積層である。6～8層は墓道入り口から羨門に向け傾斜しており、閉塞石を隠すための埋土であろう。逆に1～5層は羨門側から傾斜して堆積しており、埋土後の二次堆積である。8層下面が2回目の追葬時の床面。7層に遺物を含む。

以上のことから、この横穴墓では3回の埋葬と2回にわたる墓前祭祀に関わる行為が認められた。

（3）羨道、玄室（第12図）

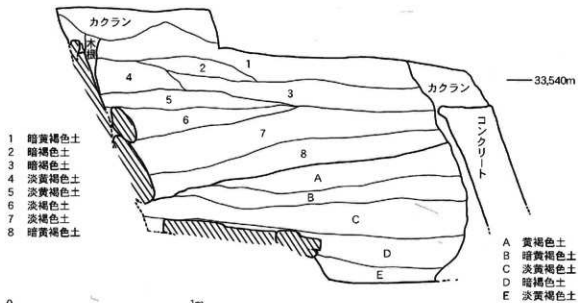
羨道は長さ1.24m、羨門幅0.76mである。玄室は隅丸方形で長さ2.24m、玄室中央で最大幅2.44mを測る。天井部はアーチ型で、中央部分が崩落しており高さは不明であるが、中央部付近で1m前後であろう。床面には約10cm前後の排水溝が玄室中央部及び周壁に設けられる。床面はほぼ平坦であり、玄室には人頭大の円礎を、羨道部には板石を敷きつめている。敷石は中央の排水溝及び周壁共に羨門側から奥壁に向けて敷きつめた後、左右に広がるように全体に敷きつめる方法がとられている。

（4）出土遺物

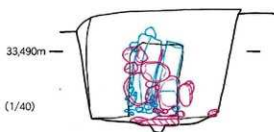
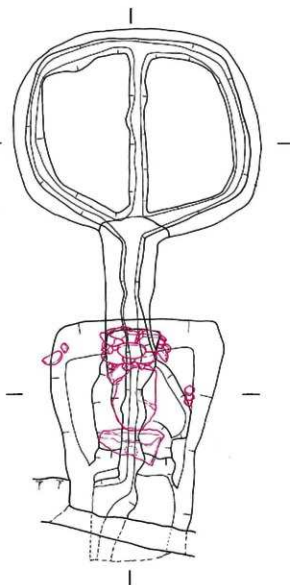
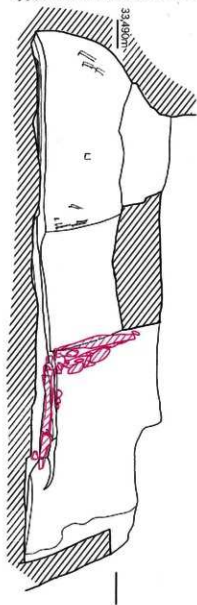
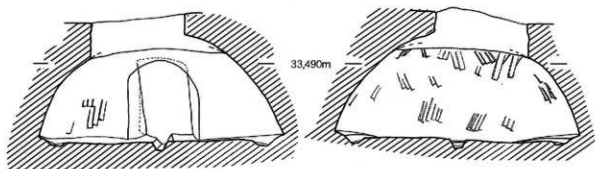
前庭部

・出土状況（第7図）

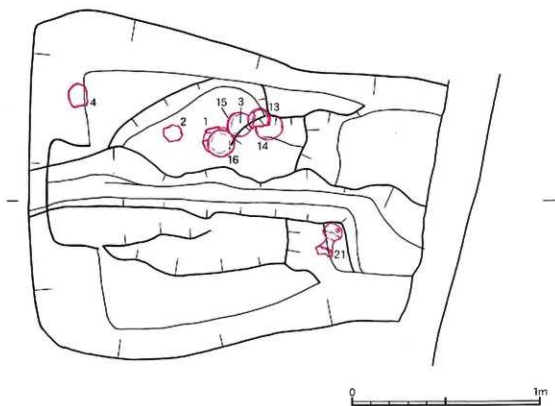
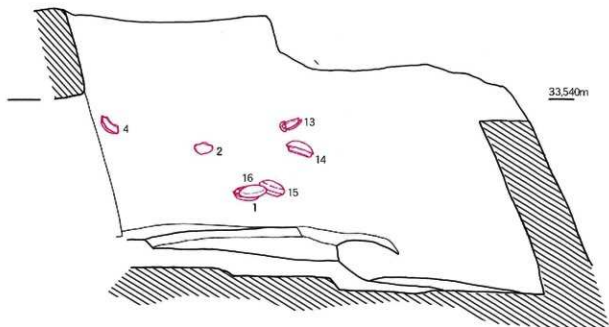
前庭部での出土層位については、土層の項で説明したように、第2層群、第3層群C層及び第4層群7層より出土していることから、初葬及び1・2回目の追葬に伴う供献土器と考えられる。出土した供献土器は坏蓋、坏身、甗等の須恵器や須恵器片である。坏はほぼ完形で甗は破砕されて出土した。坏はいずれも羨門に向かって右側に長軸と並行するように並ぶ。第1回目の追葬段階では須恵器坏蓋、坏身が2個体セットで重ねて埋置されていた。追葬時には羨門に向かって右に坏が破砕された状態で、左に頸部中央から口縁部が破砕された甗が埋置されていた。



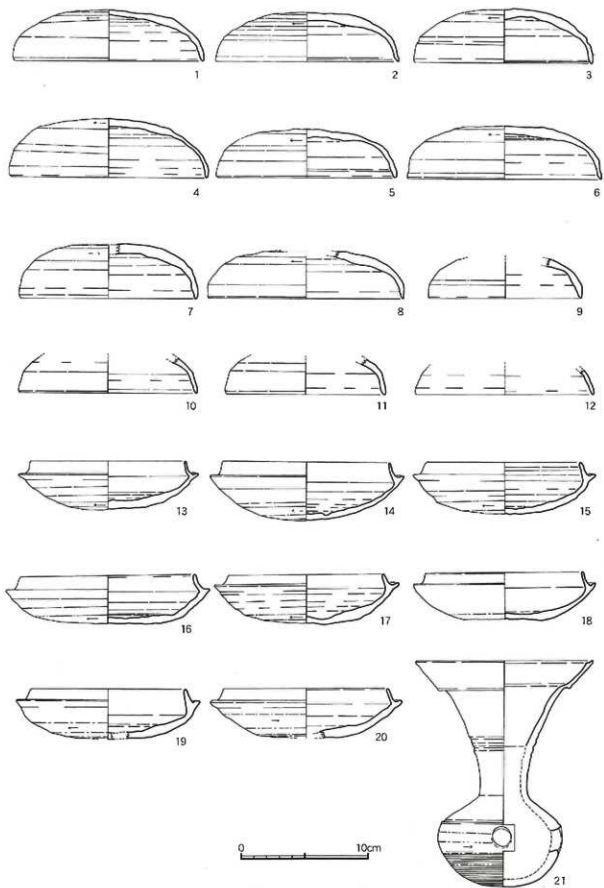
第5図 坂手横穴墓土層図（1/20）



第6圖 坂手腰横穴墓平・断面圖 (1/40)



第7図 坂手隈横穴墓前庭部運物出土状況 (1/20)



第8圖 坂手隈横穴墓前庭部出土遺物実測図 (1/3)

・出土遺物 (第8図)

1~12は須恵器坏蓋である。9・11を除くといずれも口径が14cm~16cm内に収まり、器高はいずれも4cm前後である。いずれも天弁部は丸みを帯び、内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後ヘラケズリが施される。3の肩部には沈線が走り、3・5・8・10の口縁部内面には沈線もしくは不明瞭な段を有す。13~20は須恵器坏身である。口径は12cm~16cm以内であり、器高は4cm前後である。いずれも受け部は水平のび、底部は丸く、外面は回転ナデ後ヘラケズリが施されており、1の内面には同心孔の当て具痕が残る。21は胎である。頭部中央から口縁部は破碎されており、口縁部片は散布された状態であった。頭部に二条、胴部に一条の沈線を巡らす。

玄室内

・出土状況 (第9図)

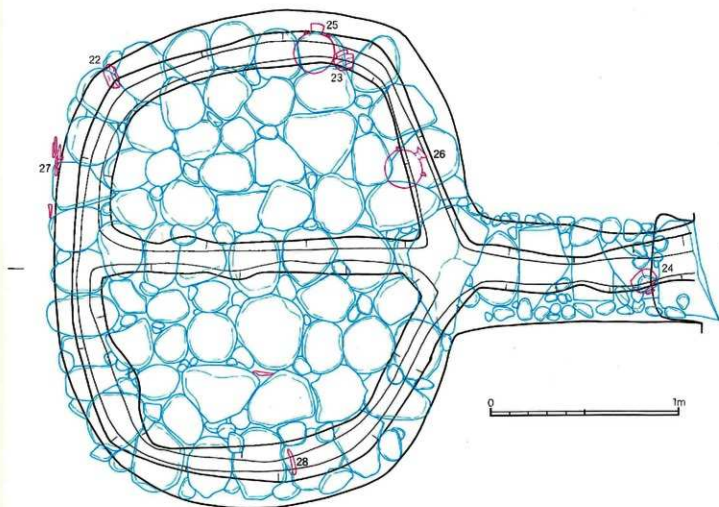
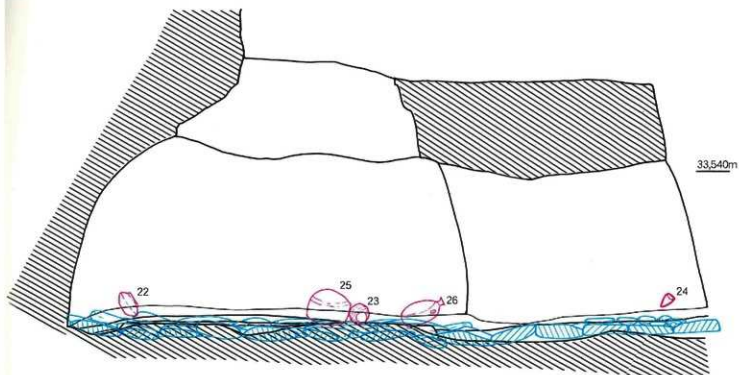
- a) 埋葬人骨 人骨は認められなかった。
 b) 副葬品 須恵器は奥壁に向かって右側壁際の門礎の上や羨道部で検出した。奥壁付近では埴が傾いた状態で、中央やや玄門よりの側壁際で短頸壺と提瓶、羨門付近には提瓶が横伏せの状態を検出した。鉄器類は、奥壁付近で鉄鏃、奥壁に向かって左側壁際で刀子が、また敷石の間に鉄鏃片や刀子が出土した。羨道で横瓶を検出したが、その出土状況から最終閉塞直前に副葬した供献土器である。

・出土遺物 (第10・11図)

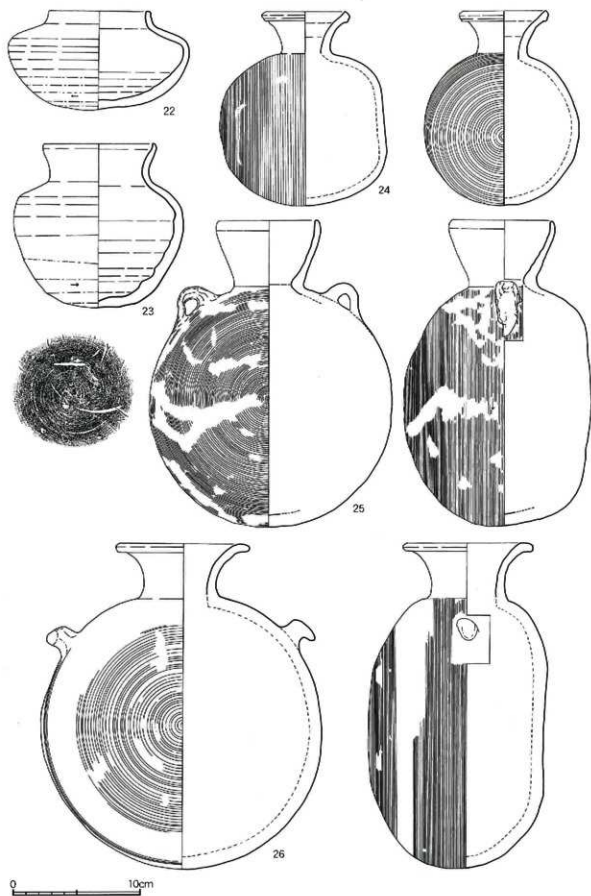
22は短頸壺である。口縁部は直立し、端部は丸い。胴部には回転ナデ後ヘラ削りが施される。23は埴である。口縁部はわずかに外反し、端部はやや内傾する。胴部には22と同様に回転ヘラ削りが施されている。24は横瓶である。口頸部は外反しながら伸び、端部はいったんかえり肥厚する。胴部にカキ目が施される。25・26は提瓶である。25は22と並んで出土しており、セットとして副葬されたものである。25の口縁部は外方向に伸び、端部はかえらずやや内傾する。胴部にはカキ目が施され、外面両肩には輪状の取っ手がつく。26の口縁部は外反しながら伸び端部はかえらず内傾する。胴部にはカキ目が施され、外面両肩には輪状の取っ手がつく。27は両肩(まち)で、28は片肩(まち)である。29は刀身、30は基部片である。31~46は鉄鏃で、31~36は短頸鏃、37~46は長頸鏃である。31・32は鏃身部分が方頭形を呈す方頭斧箭式(ほうとうふやしき)と呼ばれるものである。33は鏃身部分が圭頭形である圭頭斧箭式(けいとうふやしき)、34はふくらを鏃身部の最大幅とするタイプである。35・36は短頸鏃の筈鍔(のかつき)部。37~43は長頸鏃の筈鍔(のかつき)部から鏃身部にかけての鏃片であり、撃前式(のみやしき)と呼ばれるもので、38・39は直角の闊(まち)を有す。40・41鏃身部、44~46は筈鍔(のかつき)部から基部にかけての鏃片である。

第1表 坂手腰横穴墓出土鉄器計測表

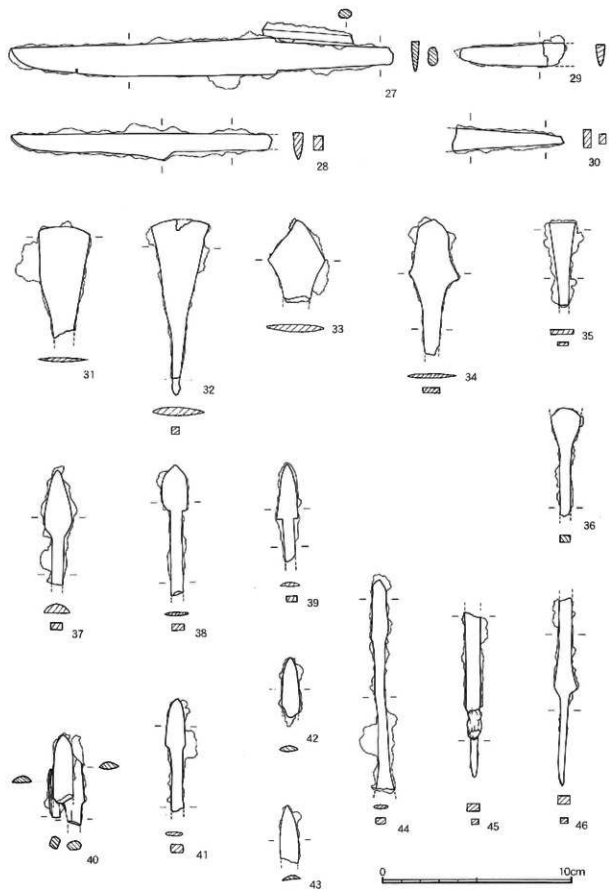
図1	器種	全長(m)	分厚さ(m)	口縁部		肩部		腹部		基部		備考	番号	器種	全長(m)	分厚さ(m)	口縁部		肩部		腹部		備考		
				傾(mm)	厚(mm)	傾(mm)	厚(mm)	傾(mm)	厚(mm)	傾(mm)	厚(mm)						傾(mm)	厚(mm)	傾(mm)	厚(mm)					
26	刀子	20.0	14.1	+1.9 -0.4	---	---	---	-0.0 +1.5 -0.5	---	---	---	72.1	27	鉄鏃	6.2	3.4	+1.0 -0.0	-2.8	-2.5 -0.4	---	---	---	7.4		
27	刀/	13.3	8.6	-1.1 -0.5	---	---	---	-0.9 -0.5	---	---	---	21.7	28	鉄鏃	6.9	3.4	+1.4 +0.2	-1.5	-0.7 -0.1	---	---	---	7.5		
29	刀/	4.5	---	-1.1 -0.5	---	---	---	---	---	---	---	6.2	刃部片	3.0	3.0	+1.2 -0.2	-2.4	-2.3 -1.2	---	---	---	3.8			
30	刀/	5.9	---	---	---	---	---	-1.0 -0.4	---	---	---	5	基部片	3.0	---	---	---	---	---	---	---	---	---		
31	鉄鏃	6.9	6.2	-2.7 -0.2	---	---	---	---	---	---	---	16.5	方頭斧	41	鉄鏃	6.1	3.1	+1.0 -0.2	-3.0	-1.0 -0.4	---	---	---	6.1	
32	鉄鏃	9.3	6	-0.0 -0.0	---	---	---	---	---	---	---	17.6	方頭	42	鉄鏃	3.6	3.6	---	---	---	---	---	---	3.0	方頭斧
33	鉄鏃	4.4	4.4	-4.0 -0.5	---	---	---	---	---	---	---	10.4	方頭斧	43	鉄鏃	3.6	3.6	---	---	---	---	---	---	2.1	方頭斧
35	鉄鏃	4.4	---	---	---	---	---	---	---	---	---	6.9	長頸斧	44	鉄鏃	11.5	3.2	+0.9 -2.5	-9.3	-0.3 -0.4	---	---	---	---	14.6
34	鉄鏃	7.2	4.4	-0.6 -0.5	-2.8	-1.0 -0.5	---	---	---	---	---	11.5	45	鉄鏃	5.75	---	---	-8.75	-4.0 -0.5	---	---	---	---	9.6	鉄鏃片
36	鉄鏃	4.4	2.9	-1.2 -0.2	-3.1	-0.4 -0.1	---	---	---	---	---	6.9	46	鉄鏃	10.0	---	---	+10.0	-1.1 -0.5	---	---	---	---	7.5	



第9圖 坂手階横穴墓玄室内遺物出土状況 (1/20)



第10图 坂手横穴墓玄室内出土器物夹制图1 (1/3)



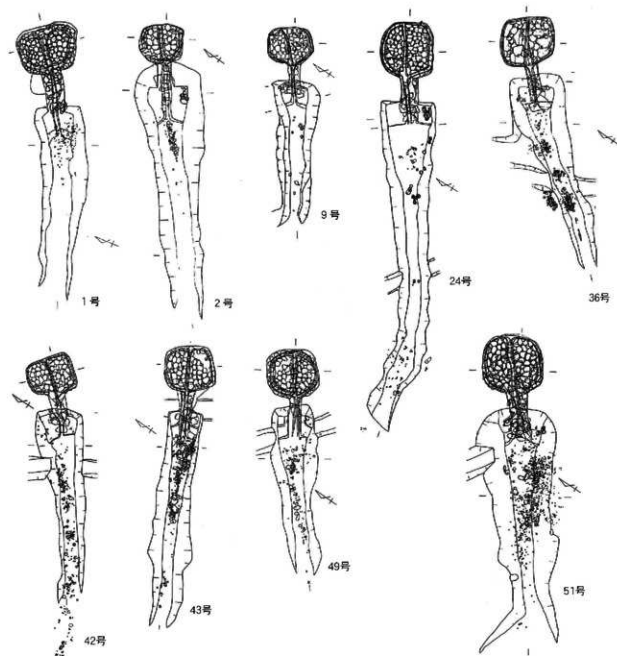
第11图 坂手原横穴墓玄室内出土物実測图2 (1/2)

第3節 ま と め

1. 遺構について

豊前地方の横穴墓については、竹並、上ノ原、水町横穴墓群の各報告書で詳細な検討が加えられており、特に山国川流域の横穴墓については、上ノ原横穴墓群の調査でかなり様相が明らかとなった(註1)。今回検出した横穴墓は1基のため、坂手隈横穴墓群の造営時期について解明することは不可能であるが、上ノ原の成果をもとに本横穴墓の時期について検討を加えてみたい。

まず、本横穴墓の形態的特徴であるが、まず、玄室の平面プランが両丸方形であること、中央部分が崩落しているが天井部はアーチ型であること、床面には幅約10cm前後の排水溝が玄室中央部及び周壁に設けられ、排水溝は羨道中央部を通り前底部へと続き、排水溝の蓋として玄室内では人頭人の門礫を、羨道部から前底部には板石を敷きつめていること、墓室部には道路工事の際に削平されており全体の規模等は不明であるが、前底部と



第12図 上ノ原横穴墓群

墓道の境には段差を有すことなどが挙げられる。このような特徴をもつ横穴墓は、上ノ原横穴墓群では1・2・9・24・36・42・43・49・51号墓などが相当する。これらは長い墓道を有するタイプで、上ノ原の時期区分では24・36・49号墓がⅢb段階、1・2・9・42・43号墓はⅣa段階、51号墓がⅣa～Ⅳb段階にあたる。以上のことから本横穴墓の時期については、上ノ原の時期区分ではⅢb～Ⅳa段階の間に位置付けることができる。

2. 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、須恵器及び鉄器類である。須恵器については前庭部及び玄室内から、鉄器類は玄室内から出土している。玄室内の遺物については、鉄線は敷石の間から、須恵器は玄室内、前庭部共に埋葬当初の状態を保って出土した。ここでは、出土層位の明確なものや埋葬当初の状態を保っているものについて検討を加えながら本横穴墓の時期について検討を加える。

①須恵器

前庭部からは須恵器は坏身、坏蓋及び瓶が出土した。これらの遺物は層位的に出土しており、少なくとも2回の墓前祭祀行為を認めることができた。また、玄室内からも良好な状態で須恵器や提瓶などが出土している。

・前庭部（第8図）

前庭部出土の須恵器は層位的に出土しており、初葬段階の遺物は確認できなかったが、少なくとも2回の墓前祭祀行為にかかわる供献土器を確認した。まず、1回目の追葬時の供献土器は1・3・13・15・16であるが、3と15、1と16は蓋と身が重なった状態で出土しており、セット関係が認められる。まず坏蓋であるが、1の肩部には不明瞭な稜がみられ、口縁部には丸く収まる。3の肩部には沈線が走り口縁部内面には内傾する段が認められる。坏身は、13・15・16とも口縁部の立上りは丸く収まるが、16は底部がやや平らである。これらの須恵器は上ノ原Ⅳa期（田辺TK43）の古相に相当する（註2）。2回目の追葬時の供献土器は2・4・13・14・21である。坏蓋は、2の肩部には不明瞭な稜が残る。口縁部内面には内傾する段を有すが、2・4とも全体的に丸みを帯びている。坏身も13・14とも丸みを帯びており、口縁部には丸く収まる。これらの坏は上ノ原Ⅳb（田辺TK209）期に相当する（註3）。21の應については上ノ原ではⅣa期～Ⅳbの古相段階（田辺TK43～TK209）に位置づけられている（註4）。

・玄室内（第10図）

玄室内から出土した遺物は、いずれも奥壁に向かって右側壁沿いに出土した（第9図）。まず短頸甕であるが、22は口縁部が短く立ち上がるタイプであるが、上ノ原ではⅢa期からⅣb期までみられ、上ノ原の分解では、短頸甕については形式学的な傾向を指摘することが困難とされており、明確な時期の比定は困難である。23についてはその出土状態から25の単純な口縁部を有す提瓶と伴件していることから、上ノ原のⅣb期に位置づけられよう。24の模瓶については、磨擦石の内側に置かれていたことから、最終埋葬に伴うものである。25・26は、提瓶である。この模瓶の形式変化については、上ノ原では、口縁部のいわゆるかえりを持つものから面を消失し単純な口縁部への変化という時間的な変遷が看取されており、胴部の取手が鍵状からボタン状、そして消失するという変化の方向は口縁部のそれとは対応しないことが指摘されている。ということは、26のほうが25よりも形式的に古いということになり、25は上ノ原ではⅣb期からⅣ期に、26は口縁部のかえりが見られないことからⅣa期のいずれかの時期に位置づけられよう。

・小 結

以上、玄室内及び前庭部で出土した遺物について、隣接する上ノ原横穴墓群の上層編年を参考に分析を試みた。その結果、前庭部での墓前祭祀行為の実施時期の1回目がⅣa期、2回目がⅣa期～Ⅳb期に比定することができる。この結果は、玄室内の遺物とも対応しているが、残念ながら初葬の遺物を確認できなかったため、その時期については明確にできなかった。しかし、Ⅲ期の須恵器が前庭部や玄室内で明確に確認できていないことから、初葬の時期がⅣ期より上がることはないと考えられる。ところで、上ノ原の編年では、Ⅳa期の須恵器について、田辺TK43と対応させているが、今回出土した須恵器を見ても、肩部には不明瞭な稜が残る。口縁部内面には内傾する段を有すなど田辺MT85に対応するものが存在する。そうであれば従来Ⅳa期については田辺TK43

実年代(西暦)	500年		550年		600年		650年	
田辺編年	TK47	MT15	TK10	MT85	TK43	TK209	TK217	TK46
小田編年	I期	II期	III-A期		III-B期	IV期	V期	
上ノ原	II段階	III a段階	III b段階	IV a段階		IV b段階	V段階	

高橋・小林 1990「九州須恵器研究の課題」古代文化第42巻第4号参照

期とされていたが、古相を田辺MT85期、新相を田辺TK43期に細分できそうである。いずれにしても、出土した須恵器からみて、本横穴の造営期間は6世紀中ごろから7世紀初頭の爆発的に横穴墓が増加する時期のものであるといえよう。

②鉄器類

鉄器類としては、玄室内から刀子と鉄鏝が出土した。ここでは、比較的時間の比定しやすい鉄鏝について説明を加えるが、出土した遺存状態が悪いため、分類には刃部の残存しているもののみを使用した。なお、上ノ原横穴墓では、酒野玲子氏が行った分類を参考にした。

・鉄鏝（第11図）

鉄鏝の出土状況は、元位置を保っているものはほとんどなく、奥壁付近に数本が円礫の上に存在する（第9図）ほかは、奥壁に向かって左側の円礫の間や排水溝の中から出土しており、刃部が残存している鉄鏝は、短頸鏝4本と長頸鏝6本である。短頸鏝の内訳はA類2本（31・32）、B1類1本（33）、B2類1本（34）で、長頸鏝はE類（37～43）のみである。A類については方頭斧箭式（ほうとうふやしき）と呼ばれるもので、上ノ原では6世紀中葉以降急増する。31・32は、B類は圭頭斧箭式（けいとうふやしき）と呼ばれるもので、1類は上ノ原では5世紀後半から6世紀前半にかけて多く出土し、6世紀中葉以降やや減少する。2類については時代が下がると出土数が増加する傾向が見られる。長頸鏝のE類については、鑿箭式（のみやしき）と呼ばれるもので、6世紀中葉以降急増する。

・小鋸

今回出土した鉄鏝は、出土状態及び遺存状態が悪く出土数も少ないことから、良好な資料とはいえず、鉄鏝のセッテ関係、社会的背景、地域性などには言及できなかった。しかし、上ノ原での分析をもとに今回出土した鉄鏝を検討した結果、これらの鉄鏝には6世紀中葉以降という共通項を持つことが明らかとなった。このことは、本横穴墓が鉄鏝から見ても須恵器の分析と同様に6世紀中葉以降のものであることを物語っているとえよう。

3. 成果と問題点

坂手限横穴墓は、昭和30年代に中津市教育委員会によって調査が実施され、13基の横穴が存在し、そのうちの1基から4体の人骨と須恵器が出土した記録が残っている。しかし、これらの横穴墓はいずれも露上が激しく、上部土層の落下で横穴内に充填されているものがほとんどであったといわれる。今回出土した横穴墓は、墓道部の大半が破壊されているものの、前庭部、羨道部及び玄室、さらには別室施設まで完全な状態で遺存していた。また、人骨は出土しなかったため埋葬状況は不明であるが、前庭部および玄室内から出土した供獻土器等によりこの横穴墓が6世紀中葉から7世紀初頭にかけてのものであり、少なくとも3回の埋葬と2回の墓前祭祀を確認することができた。ところで、坂手限横穴墓群の存在する山国川下流の沖積地の三角州にせりだす浜横谷地（下毛原丘陵）縁斜面には上ノ原横穴墓群が存在する。この上ノ原横穴墓群は1981年～1985年にかけて大分県教育委員会により81基の横穴墓が調査され、山国川流域の横穴墓の出現期や造営形態が明らかとなった。今回調査を実施した坂手限横穴墓は、上ノ原横穴墓より約180m北に位置しているが、この間には中津市教育委員会が調査した坂手限横穴墓群が位置するなど（大字相原字大久保）、これらの横穴墓群は非常に隣接して存在している。さらに坂手限横穴墓群の北には坂手前横穴墓群が隣接するなど、この下毛原丘陵斜面には、かなり広範囲に墓域が設定されていたようである。坂手前横穴墓群や坂手限横穴墓群は国道建設の際にかなり破壊されており、詳細は不明であったが、今回の調査結果をみる限り、坂手限横穴墓群については上ノ原横穴墓群と類似した点が多く、ほぼ同時期に造営された一連の横穴墓群である可能性が高く、また、坂手前横穴墓群についても同様の可能性が推測できるのである。

以上、今回の調査結果についてまとめてみたが、坂手限横穴墓を含め、この下毛原丘陵斜面に展開する横穴墓群については、その造営主体の問題や横穴墓群相互の関係等など、まだまだ多くの課題が残されており、今回のような小さな調査の積み重ねがその解明の糸口になるであろう。今後の調査・研究に期待するところである。最後になるが、今回のケースのように墓道の長いタイプの横穴墓については、工事による破壊を免れた横穴墓がまだ存在する可能性がある。今後、この一帯の開発に際しては、より細かな事前調査が必要であることを付け加えてまとめとする。

（註1） 渋谷忠孝・村上久和 1989～1992『上ノ原横穴墓群』Ⅰ～Ⅲ 大分県教育委員会

（註2） 註1と同じ

（註3） 註1と同じ

（註4） 註1と同じ

第2表 坂手隈横穴墓 出土土器観察表

番号	器種	法数 ・1法 ・2法 ・高野原式	形態の特徴	装飾の特色				焼成	備考
				内面	外側	内面	胎土		
1	丹塗	・1.4.8 ・1.2 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸い。天井部は丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	黒色粒や白色粒を多く含む。石炭を少し含む。	灰緑	定形
2	丹塗	・1.4.1 ・3.9 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸く外展。天井部は丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	黒色粒や白色粒を多く含む。	灰緑	3/23号
3	丹塗	・1.4.2 ・1.3 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸く内面に浅溝を施す。外内には浅溝を施す。天井部はやや丸く丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	黒色粒や白色粒を含む。石炭を多く含む。	灰緑	定形
4	丹塗	・1.5.0 ・4.7 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸い。天井部はやや丸く丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	淡灰褐色	黒色粒や白色粒を含む。石炭を多く含む。	灰緑	3/4号
5	丹塗	・1.4.1 ・3.8 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸く内面に浅溝を施す。天井部は丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	黒色粒や白色粒を含む。	灰緑	2/23号
6	丹塗	・1.4.8 ・4.3 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は蓋下に下り、端部は外に開く。外内にははっきりした線がみられる。天井はやや丸く丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	黒色粒や白色粒を含む。	灰緑	2/33号
7	丹塗	・1.4.0 ・4.2 ・-	口縁部は下外方にのび、端部はやや丸い。天井部は丸く丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰褐色	石灰、角閃石、砂粒を多く含む。	灰緑	2/33号
8	丹塗	・1.5.4 ・3.0 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は蓋下に下り、丸く内面に浅溝を施す。天井部は丸く丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰褐色	長石の微細粒及び白色粒を多く含む。黒色粒を含む。	灰緑	1/33号
9	丹塗	・1.2.0 ・3.0 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は蓋下に下り、丸く内面に浅溝を施す。天井部は丸く丸みを帯びる。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	長石の微細粒を少し、2〜3mm程度の石灰を多く含む。	灰緑	1/33号
10	丹塗	・1.4.0 ・3.0 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸く、内内には不規則な線を施す。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	黒色粒、白色粒を含む。	灰緑	1/33号
11	丹塗	・1.2.6 ・3.0 ・-	口縁部は下外方にのび、端部は丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰褐色	黒色粒を少し、石炭を多く含む。	灰緑	1/33号
12	丹塗	・1.4.0 ・3.0 ・-	口縁部下外方にのび、端部は丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	暗褐色(やや赤みを帯びる)	黒色粒、白色粒を含む。	灰緑	1/33号
13	丹塗	・1.5.3 ・4.6 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	灰色粒を多く含む。	灰緑	2/33号
14	丹塗	・1.4.1 ・3.8 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	褐色 灰褐色	黒色粒を少し、石炭を多く含む。	灰緑	光形
15	丹塗	・1.2.0 ・4.2 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	角閃石、砂粒を含む。	灰緑	定形
16	丹塗	・1.3.7 ・4.9 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	暗褐色	長石の微細粒を含む。1〜3mm程度の石灰を少し、白色粒を少量含む。	灰緑	定形
17	丹塗	・1.4.5 ・3.8 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰褐色	灰色粒を多く、白色粒、黒色粒を少し含む。	灰緑	定形
18	丹塗	・1.2.4 ・3.8 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	赤褐色	焼成	灰緑	1/23号
19	丹塗	・1.3.0 ・4.0 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰色	焼成	灰緑	1/23号
20	丹塗 (反転履式)	・3.0 ・-	たちあがりには内側に浅溝を施す。受け部はほぼ水平に伸びる。底面は不明。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰色	白色粒、黒色粒を少し含む。	灰緑	2/23号
21	丹塗 (反転履式)	・3.0 ・1.3 ・-	口縁部は、外反しながらのび、側面は蓋下で外反する。口縁部は蓋下をなし、腹部には二重の浅溝を施す。側面には上方に穿孔孔があり、一重の浅溝を施す。	白磁ナデ	白磁ナデ	青灰色	長石の微細粒及び2mm程度の石灰を少し含む。	灰緑	2/33号
22	丹塗	・7.7 ・1.4.2 ・-	口縁部は直立しながらのび、側面は丸い。側面にはほぼ最大径に上方に穿孔孔を施す。底面は丸く丸い。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰色	石灰を含む。白色粒が多い。	灰緑	光形
23	丹塗	・3.8 ・1.2.5 ・1.9.2 ・-	口縁部はわずかに外反しながらのび、側面は丸く上方に穿孔孔を施す。側面には蓋下に浅溝を施す。	白磁ナデ	白磁ナデ	黄褐色	1〜3mm程度の石灰を少し、白色粒を少量含む。	灰緑	定形
24	丹塗	・7.8 ・2.4 ・1.9.2 ・-	口縁部は外反しながらのび、側面は丸く上方に穿孔孔を施す。側面には蓋下に浅溝を施す。	白磁ナデ	白磁ナデ	暗灰褐色	白色粒と、砂粒を多く含む。	灰緑	定形
25	丹塗	・7.2 ・4.0 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸くやや丸みを帯びる。側面はほぼ水平に伸びる。外内両面に浅溝を施す。	白磁ナデ	白磁ナデ	暗灰褐色	長石、角閃石を含む。	灰緑	光形
26	丹塗	・1.0.4 ・2.4 ・2.2 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸くやや丸みを帯びる。側面はほぼ水平に伸びる。外内両面に浅溝を施す。	白磁ナデ	白磁ナデ	灰色	焼成	灰緑	光形



山国川左岸（福岡県大平村）から坂手隈横穴墓を望む



前庭部遺物出土状況



前庭部閉塞状況



前庭部完掘状況



羨門閉塞状況



羨門



羨道部遺物出土状況



玄室内遺物出土状況（奥壁に向かって右）

図版1 坂手隈横穴墓遺像・遺物出土状況



羨道部排水施設



羨道部排水施設

出土遺物
前庭部



7-2

环蓋



7-4

环蓋



7-6

环蓋



7-1

环蓋



7-14

环身



7-15

环身

図版2 羨道部排水施設・前庭部出土遺物



坏身



罍

玄室内



提瓶



提瓶



横瓶



短頸壺



罍

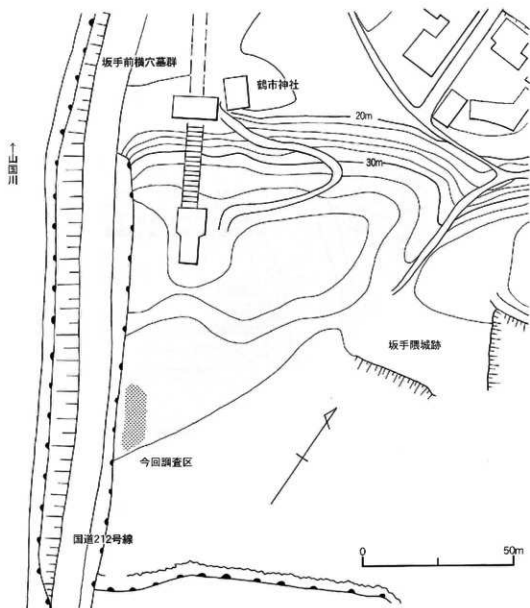
图版3 前庭部出土遺物・玄室内出土遺物

第4章 坂手隈城跡の調査（平成15年7月28日～平成15年8月28日）

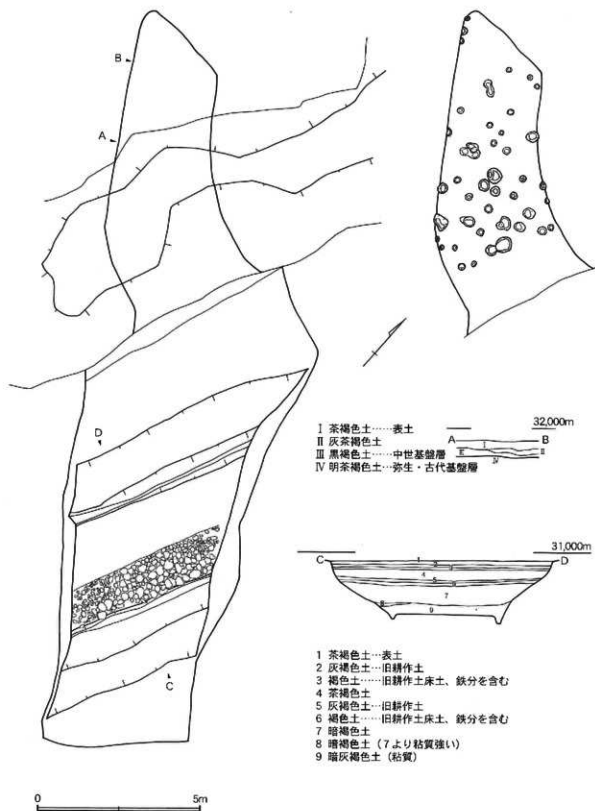
第1節 調査経過と概要

坂手隈城跡は大分県中津市大字相原にある中世城跡である（第1図）。当該遺跡は国道212号交通安全工事に伴い、2001年7月から発掘調査を実施しており、今回はその第3次調査にあたる。これまでの調査の結果、坂手隈城に伴う遺構としては、幅3.5m、深さ1.2mの築研堀の内堀が1条検出されている。その他では、弥生時代の遺構として終末期の石蓋土坑墓、周溝を伴う土坑墓群等が確認されている。

今回、2003年度の工事予定範囲に坂手隈城の上塁が入ったため、2003年6月17日に試掘調査を実施した。城の上塁に直交するトレンチを設定し、重機による掘り下げて、上塁以外の遺構の有無を確認した。その結果、上塁から約2m南に離れた箇所、上塁と平行して走る堀（幅約6m、深さ約2m）を検出した。そこで協議を行い、7月28日から8月28日の1ヶ月間、本調査を行った。調査着手時に重機による現耕作土と床土下位までの除去を行い、それ以下については、人力による掘り下げ及び遺構検出を行った。その結果、坂手隈城に伴う高さ2mの土塁の他、幅7mの堀を検出した。以下、調査の概要と出土遺物について報告を行う。



第13図 坂手隈城跡の位置とその周辺地形図 (1/1250)



第14図 板手隈城跡遺構配置図 (1/120)

第2節 遺構と遺物

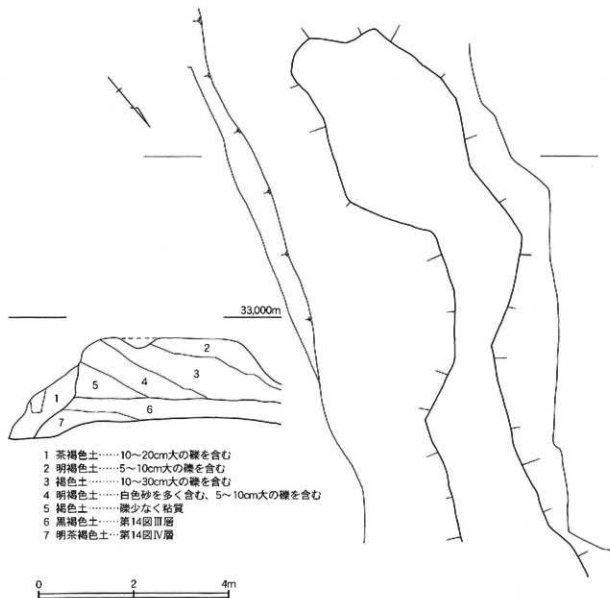
調査区は上層を挟んで土地が二段に形成されており、下段は水田、上段は畑として利用されていた。水田部は現耕作土等20cmほど土を剥いだ段階で畑を検出した。上段については土塁を除いた後、IV層で柱穴群を検出した。

上段畑部の基本層序は以下の通りである（第14図）。

- I層（茶褐色土）表土
- II層（灰茶褐色土）
- III層（黒褐色土）中世の基盤層
- IV層（明茶褐色土）弥生・古代の基盤層

1. 柱穴群（第14図）

調査区西側で柱穴群を確認した。しかし、その規模や並びが不規則であること、また遺物については弥生時代の甕の口縁部片が数点出土しただけであることから、その性格については不明である。



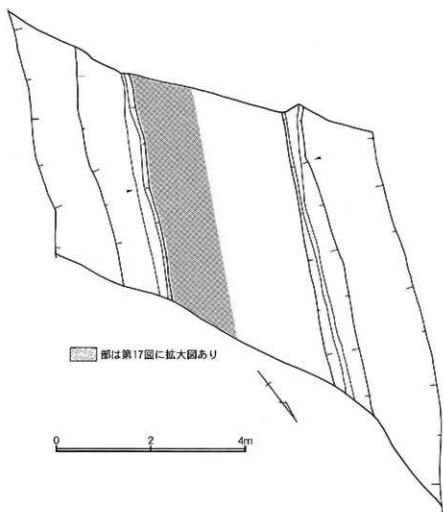
第15図 坂手横城跡土塁実測図（1/80）

2. 土塁 (第15図)

坂手隈城に伴う土塁は調査区北寄りを南北に走っており、西側が城の内部になる。土塁の東側は、後世の水田開発のために削平されているが、その規模は現状で高さ約2m、最大幅約6mを測る。断面観察によると、中世の基盤層上に外(東側)から内に、斜めに土を突き固めて構築したことが判る。断面は崩斜形を呈し、基底部幅は約4.5m、基盤上の高さは1.3mである。土塁内側は礫を含んだⅢ層が2.5mほど広がっており、土塁に添って道状に続いていたと考えられる(写真5・土塁断面)。土塁外側は後世の水田造成のため削平を受けており、堀との間隔を考慮すると、本来はあと3m程度外側に広がっていた可能性もある。実際調査区外にある土塁は堀の肩からそのまま立ち上がっており、上面で幅約10mの規模をもっている。

3. 堀 (第16図)

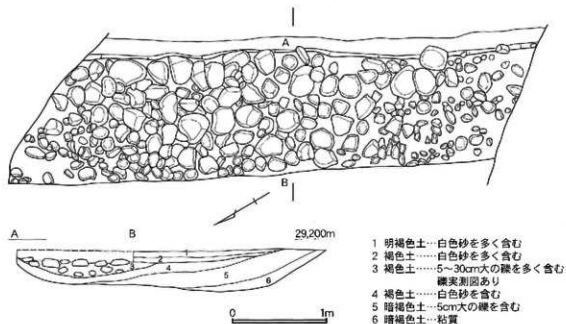
坂手隈城の外堀は土塁の外(東側)に並行する状況で確認された(第14図7層以上)。さらにその下位で、道状遺構を検出した。つまり、掘削当初、堀は深さ2.4m、幅3.4mの掘割状の道であった。若下の土砂の堆積の後、水が溜まりやすい東側に礫を入れて補修を施している。その際、両側に溝を掘って、さらに水捌けを良くしている。実際、調査中でも西側に比べ、東側の方が水が溜まりやすかった。その道幅は約2.8mで、側溝は幅20cm~30cm、深さ20cm~50cmの規模をもつ。その後、坂手隈城の外堀としてその幅を拡幅して掘り直されている。断面逆台形を呈し、上面幅約7.2m、底面幅約3.7m、最大深1.5mを測る。その後は一気に埋めて、水



第16図 坂手隈城跡埋没測定図 (1/80)

用として利用された時期が2度あることが、土層観察から判った。

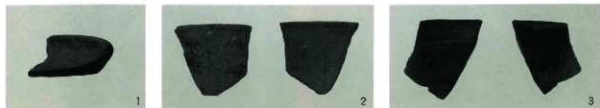
堀からの出土物については、9層(第14図)から土師質土器小皿(第18図1)と瓦質土器播鉢(第18図2・3)が出土している。1の小皿は復元口径7.0cm、底径5.6cm、器高0.9cmを測る。その器壁は薄い。2・3の播鉢は上部しか残っていないが、斜め罫目は確認できない。その他7層より上位からは、18世紀以降の肥前系陶器皿の破片が出土している。出土遺物より、堀割状の道は13~14世紀には存在し、何度か補修しながら、16世紀まで機能していたと考えられる。間もなく拡張して坂手隈城の堀となり、城の廃絶後には堀は埋まり、18世紀以降降水出化されて現在へと続く。



第17図 坂手隈城跡堀下部の遺実測図(1/40)



第18図 坂手隈城跡堀出土遺物実測図(1/3)



図版4 坂手隈城跡堀出土遺物

第3節 ま と め

坂手隈城跡の立地する通称「下毛原丘陵」はこの場所で山国川に突き当たる。そのため、この地は山国川沿いの交通の要衝となり、ここから北に広がる沖代平野及び川を挟んだ福岡県側の平野を一掃することができる。

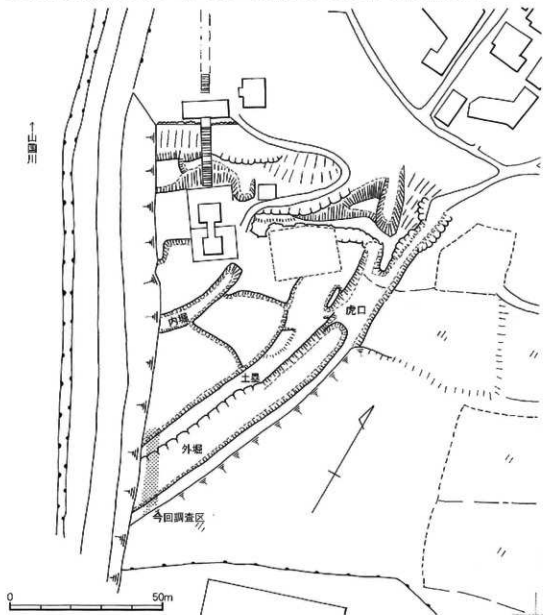
今回の調査で、坂手隈城の外堀の下位から遺状遺構が検出され、出土遺物から南北朝期に位置づけることもでき、当時、丘陵から山国川沿いに降りていく扇状状の道があったと考える。その後、扇状を拡張して幅約7mの堀と高さ約2mの土塁が築かれており、これが坂手隈城に伴うものと考ええる。その構築時期を確定する遺物は今回出土していないが、前回の調査では内堀等から16世紀後半の遺物が出土している（註1）。

『成恒文書』の観応2（1351）年の軍忠状の中に「酒（坂）手隈において敵を追い散らした」と記されている（註2）のが、この地の文書での初見である。『大分の中世城館』の中で、小柳は「城の構造から見て、坂手隈城は戦国末期のものであり、観応2年の戦は「城」ではなく、酒（坂）手隈の「場所」において起きたものと考える」（註3）としている。今回の発掘調査の成果も、それを支持するものである。しかし、調査面積が狭いこと、さらに出土遺物が少ないことから積極的には言及できない。今後の調査の進展を待ちたい。

（註1）大分県文化財調査報告書第158輯『坂手前遺跡』大分県教育委員会 2003

（註2）大分県文化財調査報告書第148輯『大分の中世城館』第1集51. 成恒種定軍忠状 大分県教育委員会 2002

（註3）大分県文化財調査報告書第170輯『大分の中世城館』第四集総論編 大分県教育委員会 2004



第19図 坂手隈城の縄張り図と今回の調査区（1/1250）（『大分の中世城館』第四集総論編より転載）



坂手隈城跡から山国川対岸を臨む



坂手隈城跡から中津市街を臨む



土塁と堀（上空から）



堀と土塁（堀の外から）



土塁断面



堀断面



堀割状の道



発掘風景

図版5 坂手隈城跡遺景・遺構

報告書抄録

ふりがな	さかてくまよこあなぼ・さかてくまじょうし
書名	坂手隈横穴墓・坂手隈城跡
副書名	国道212号交通安全に事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第6集
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	—
編著者名	甲斐 寿義・松本 康弘
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判山字ビワノ門1977番地
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
さかてくまよこあなぼ 坂手隈横穴 墓	なかつしおらあそあひいら 中津市大字相原	101	61	33°33'37"	131°11'34"	20030407 ~ 20030429	100	国道212号交通安全工事
さかてくまじょうし 坂手隈城跡	なかつしおらあそあひいら 中津市大字相原	101	60	33°33'41"	131°11'32"	20030626 ~ 200307	100	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂手隈横穴墓群	横穴墓	古墳	横穴墓 1基	須恵器・鉄器等	
坂手隈城跡	城跡	中世	土塁・堀	土師質土器・瓦質土器	

要 約	<p>坂手隈横穴墓群は中津市大字相原に所在する。山国川右岸、標高約33mの洪積台地西端の急峻な崖面に位置する。この横穴墓群は、昭和40年以前に中津市教育委員会によって調査が行われ、13基の横穴墓を確認し、多数の骨片と須恵器が出土したという記録が残っている。今回調査した横穴墓は、国道212号交通安全事業の掘削工事での平成15年3月に玄室の天井部が陥没し、その存在が明らかとなった。本調査は平成15(2003)年4月7日から平成15年4月19日の間実施した。その結果、この横穴墓は6世紀後半のもので、墓道部は消滅しているが前庭部と閉塞石が良好な状態で遺存する未開口の横穴墓であり、前庭部から須恵器、玄室からは須恵器や鉄器等を検出した。</p> <p>今回の坂手隈城跡の調査において、土塁とその外に展開する外堀の一部を確認した。外堀は元々、堀割状の道として存在したものを拡張して造られていることが判った。その年代観は道が13~14世紀で、外堀が16世紀後半である。</p>
-----	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

坂手隈横穴墓・坂手隈城跡

—国道212号交通安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第6集

平成17年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL (097) 597-5675

印 刷 日の丸印刷株式会社
〒874-0936
別府市中央町9番15号
TEL (0977) 22-0341

